

心のとしび

シリーズ——1

人生をいかに生きるか

遠藤周作・三浦朱門編

春秋社

人生をいかに生きるか

心のともしびシリーズ 1

1969年11月25日 第1刷発行 定価 ¥320

編 者 遠 藤 周 作
三 浦 朱 門
発行者 鷺 尾 貢
印刷所 一興印刷株式会社

発 行 所 東京都千代田区 株式 春秋社
外神田2-18 会社
電話 東京(255)9611(代) 振替 東京24861 郵便番号101

NDC910

©1969年

心のともしび

シリーズ—1

人生をいかに生きるか

遠藤周作・三浦朱門編

心のともしびシリーズ1 目次

対談

青春の不安と渴望 遠藤 周作・三浦 朱門……………九

少年期（一一―三二）

——怠けと勤勉・学校教育・少年期の体験と読書・本当の自分とは・意志が弱いと誰が決めるか

青年時代（三二―五三）

——親子の分かれ目・子供の挫折と社会性・心の家出と文学・いかに生きるか

社会人（五四―六二）

——ピラミッド式構造・電話と月給・ああ！教授会

随筆

人生をいかに生きるか 小堀 杏奴ほか……………三

仕事

人間の使命	人間の使命	観想のすすめ
短いチヨーク	短いチヨーク	人生とは奉仕すること
人生の計画	人生の計画	門出
働くこと	働くこと	制服
成功する方法	成功する方法	働くこと
働くこと	働くこと	人生の計画
忙しがつている人	忙しがつている人	働くこと
人生の計画	人生の計画	こよみ
働くこと	働くこと	乞食
或る怠け者の話	或る怠け者の話	失敗の教え
ひそやかな人生の香気	ひそやかな人生の香気	四人のとしご
手紙	手紙	使命感の日々
人生の計画	人生の計画	編む
働くこと	働くこと	職人氣質
人間の使命	人間の使命	人間の真の仕事
一年をふりかえる	一年をふりかえる	ある日の職場から
小堀 杏奴	小堀 杏奴	浜尾 実
小堀 杏奴	小堀 杏奴	浜尾 実
小堀 杏奴	小堀 杏奴	萩原 葉子
小堀 杏奴	小堀 杏奴	萩原 葉子
矢代 静一	矢代 静一	萩原 葉子
相場 均	相場 均	霜山 徳爾
相場 惟一	相場 惟一	霜山 徳爾
相良 惟一	相良 惟一	戸川 エマ
曾野 綾子	曾野 綾子	戸川 エマ
曾野 綾子	曾野 綾子	広瀬みつほ
田中 澄江	田中 澄江	片山 光男
中里 恒子	中里 恒子	大福 茂経
中里 恒子	中里 恒子	家坂 りう
中里 恒子	中里 恒子	西尾 泰
中里 恒子	中里 恒子	山崎 隆
中里 恒子	中里 恒子	松崎 英雄

学 校

先生	バンザイ	曾野	綾子	二つの言葉	戸川	エマ
文字を書く	田中	澄江	よく遊び、よく学べ	戸川	エマ	
記憶	霜山	徳爾	なければならぬこと	浜尾	実	
学ぶ姿勢	霜山	徳爾	レクリエーション	浜尾	実	
家庭教育のあり方	霜山	徳爾	現代の教育	相良	惟一	
レクリエーション	霜山	徳爾	忘れるということ	相場	均	
人生いかにするか	霜山	徳爾	勉強	小堀	杏奴	
寛容の心の欠如	霜山	徳爾	レクリエーション	小堀	杏奴	
教育の二つの車輪	霜山	徳爾	現代の教育	小堀	杏奴	
きなこと少年	山本	健吉	サラブレット	三浦	朱門	
教室のいたずら	山本	健吉	こたつの教訓	市川	市良	
山羊の声	山本	健吉	六十の手習い	宮本	是男	
レクリエーション	中里	恒子	恩師	鈴木	和幸	
心配もまた楽し	中里	恒子	私は准看護学校一年生	宮崎	文子	
現代の教育の教えすぎ	中里	恒子	先入観	植田	寿治	
恩師	戸川	エマ				

家庭生活

一七

女为天職(その一)	田中千禾夫	いろいろ	浜尾 実
女为天職(その二)	田中千禾夫	女性の美しさ	相場 均
女为天職(その三)	田中千禾夫	健康について	相場 均
健康	矢代 静一	れんぎょうの芽	田中 澄江
ある日曜日	遠藤 周作	時間	萩原 葉子
二匹の犬と兎	遠藤 周作	日々のしあわせ	相良 惟一
眼に見えぬ祈り	小堀 杏奴	アンガトとゴメンチャイ	相良 惟一
日々の幸せ	小堀 杏奴	家庭のきずな	霜山 徳爾
健康	小堀 杏奴	しあわせとは	角 千恵子
私の好きな言葉	小堀 杏奴	努力	田村 正視
二十本の口紅の蓋	曾野 綾子	雑草のような私	竹中喜枝子
病気をしてはいけない	浜尾 実	遠足の日のこと	福村 洋子

青春の不安と渴望

対
談

三 遠
浦 藤
朱 周
門 作

少年期

■ 怠けと勤勉

三浦 遠藤はかつては非常に怠け者の少年だったわけだろう。いまこうしてみると、対談でも原稿でもあるいは人の世話でも、実にまめによくやるよな。どうして昔の怠け者が、こんなにこう勤勉に働くようになったんだろう。これだけ昔からやっておったら、浪人なんかせずにパッパッパッとどこかの大学にも入ったと思わんか。

遠藤 まあ一つは性格的にもよるだろうな。けれども、ぼくの家庭がまあちょっと特殊な事情だったりして、少年の時、すでに生きるのがイヤやったんや。そういう気持で怠けると、ズルズルズルッと怠けてだな、怠けているときのほうが人生の翳を味わえたり、怠け友情とかありましてね、それに浸ったわけです。それに、勉強するだけの精神的な根拠が、当

時、自分でまだ見つけられなかった。怠けも、君、時には倫理の場合があるよ。

三浦 誠実な、怠けるほうが誠実だってことね、おれは、やつぱり、それ確かにそのとおりだと思うんだよね。つまりね、昔の学生時代に比べて、おれは随分勤勉と思うんだよ。いまやっていることはなんのためかというところが、わりとよくわかるんだ。昔の学校でやっていることっていうのはね、「ハイ、おとなしくしなさい。廊下走っちゃいけません。数学の宿題全部やりなさい」と。これね、目的がはっきりしてねえんだよ。しいて目的というとな、入学試験のために。——そんなバカな、という気がするんだな。

遠藤 しかもね、まあきみのときもそうだけど、ぼくらのときの勉強というたらね、戦争中だったから実に実にアホくさいこと教えとったもんね。「神武・綏靖・安寧・孝昭・孝安」とか、学校で教えられることがバカバカしくてやる気にならなんだ。

三浦 これいまの人にいったってわからないんだな。

遠藤 ああ、わからないでしょう、天皇の系図を覚えさしたりだな、「軍人に賜わりたる勅諭」とか、そういうことを教師が至上命令のように生徒に覚えさしておるだろう。ばかでない限りこれ、アホくさ、ということわかります。そのアホくさに目をつぶって従うことの

できる奴は、優等生になれた。それがアホくさいということを、「アホくさ」と思った奴は劣等生になった。

三浦 それからね、いちばんしゃくにさわったのは、アホくさいことを知らんでね、大人の要求することを一応こなしている奴ってのは、けっこうおったろう。あれいちばんいやだったな。それアホくさいというの知っていてね、だけどこれは身のためだからと思ってやるっていうのは、それはそれでいいと思うんだよ。おれ中学三年のときにいまだに覚えているけど一人のガリ勉がいてね、あと四、五年だから頑張ろうやいうんだよね。それなにかついうと、あと一年ぐらい夢中で勉強して一高に入って、それから、一高である程度の成績をとって東大法学部へ行く。東大をいい成績で出れば、あとは一生エスカレーターだっていうわけだよな。だからね、二人でこれからあと四、五年、死に物狂いで頑張ろうときたんだな。おれはいま当世風でいうと、ついていけなかったけど、それはそれでバカが……と思いがら、やっぱり一面偉いと思うたよ。おれにはできないという感じがあるよ。だけどいちばん嫌だったのは、それほどの信念もなく、また怠けもせずフラフラしている、いわばノンポリかな、そういうのがいちばん嫌だったな。

遠藤 おまえ、しかし、アホくさいと思いながら勉強したほうやろう。その理由如何。

三浦 それはおれね、一人息子だからな、一人息子というのはその点つらいんだ。勉強せんだけど、試験の前の日になるとちゃんと勉強したよ。

遠藤 でも、おまえ一番やろ。

三浦 そんなこと、ジョ、冗談でしょう、とんでもない。

遠藤 高等学校入ったやないか。

三浦 そんなことない。おれなんかぜんぜん秀才の部類じゃないよ。おつき合いでやむを得ず、ある程度のことをチョビチョビとやってたわけだな。

三浦 嫌いだったのは国語だった。きみ、国語嫌いではなかった。

遠藤 相対的には好きだった。相対的にはだよ。

三浦 なんや。

遠藤 だってあれやもん、文章っておれは好きやったもん。文章には、情感があったから好

きだった。おれの知らん世界に連れてつてくれたから好きやった。それに、先生によるんだな。あの頃は、先生にもよるんだよ。

三浦 だけでも一つね、教科書がとてくだらんかったと思うよ、国語の教科書。

遠藤 思う。でも、それでも、おれは好きやった。

三浦 とてもね、空々しい文章が多かったよな。さっきなんていうたかな、昔の学校教育の内容は、空々しいというふうなことだったんじゃないかと思うけれど、いちばん空々しさというのは国語の教科書にあったように思うんだ。変に技巧的な文章とか、大げさにしたり偽った感情とかね、愛国心を強制するような、変にごまかしが多かったと思うよ。

遠藤 だけど、それわかっておっただろう。

三浦 うん、つまりね、漢文ならときによって感動して涙ぐむこともあるけど、国語の教科書ではぜんぜん涙ぐまない。

遠藤 おまえ、そういうときどうしていた、おれはハクションということうた。

三浦 おれは要するに、なにも考えとらずにポーッとしておった。

遠藤 あ、そうか、おれはだな、そういうときにはな、教師がそういうこというと、隅の方